

## 〔新収品紹介〕

## 張宏筆「越中真景図冊」(1639年作)

全 8 図 絹本着色 各30.0×18.2cm

張宏は呉県(今の江蘇省蘇州)の人。字は君度、号を鶴澗といい、明末万曆5年(1577)に生まれ、清初康熙7年(1668)まで活躍していたことが知られています。

彼の作品は、現在、数十点以上知られ、その作品内容からも明末清初の重要な画家の一人であると言えます。しかし、その事績に関する詳しい記述は残っておらず、荊州府長官を務めたことが知られるだけです。

今回紹介します「越中真景図冊」は、既に内外の書物(『東洋美術』第2巻、1968年や“The Distant Mountains” James Cahill, 1982年など)に掲載されており、張宏の作品として高い評価を受けているものです。当館でも1979年に常楽庵寛集中国絵画展の際に展示し、このたび新収品として展示することになりました。

張宏の作画範囲は多岐にわたっていますが、文人画家の常としてその中心は山水画にありました。現存作に徴して考えますと、彼は伝統的で観念的な山水画には飽き足らなかったようで、実景観照にもとづく斬新な構成の山水画をしばしば描いています。

この越中真景図冊もそうした写景画の一つです。全部で八図ありますが、その最後に次のような自識が記されています。

越中名勝、甲於寰海、洋々乎、大方觀哉、耳習稔矣、己卯春、泛葦以渡、与所聞、或半參差、帰出紉素、以写如所見也、殆任耳、不如任目与。

己卯秋日 張宏識

これによって、崇禎12年(1639)60歳のときに浙江地方の名勝を描いたものだとわかります。こうした図に多く見られる地名の記入がないために、残念ながらそれぞれの図がどの景か判然としません。この図もまた、北宋時代の瀟湘八景

図から連綿と続く、名勝八景図の伝統に立つものと言えます。

この自識で興味深いのは、張宏が、見たものを表現するには耳より目、つまり言葉より画、に任せられた方が良いと述べている点で、彼の実景描写に対する自信の程を窺うことができます。

また、張宏はこの名勝図をその場で描いたのではなく、帰ってから制作したこともわかります。おそらく現場でのスケッチをもとに画室で描いたのでしょう。こうしたやり方は元四大家の一人黄公望にも見られ、文人画家の伝統的な方法です。

およそ中国では今日我々が言うところの写生画のような、見たまをそっくりそのまま描くことが行われたことはありません。言い替えば、中国では画は常に画家の創造物として理解されていたのです。ですから、西洋画の概念を捨てて、虚心に画を見る態度が、特にこの図のような西洋画風の影響が指摘されるような特異な作品の場合、要求されるのではないでしょうか。(藤田伸也)

第 8 図

